

第一期「よみがえれ大阪」市民講座

第1回 文化「大阪発 アートの力でつながりづくり」11月19日(水)

人生の「光」となる 言葉をつむいでいく

う え だ か な よ
詩人、ココラム代表 **上田 假奈代さん**

市民との新たな共同の広がりネットワークづくりをめざす大阪市をよくする会の市民講座。第1回は市民の期待をよび、60名を超える参加者で好評をもって迎えることができました。講座内容を紹介します。



詩人と作家を両親にもった影響なのか、子供の頃地元、吉野の山林を眺めているとき「こえが見えた」、ひらめいた。そしてベトナム難民の子供と出会い、「国のこどもたちを助ける仕事をしたい」という明確な希望もつ姿に感動し、31歳の時に詩を仕事にしたいと考えた。

しかし、その当時日本で「詩人」を職業として生計を立てることができるのは、谷川俊太郎さんただ一人であった。朗読ブームが起こった2000年に詩人になりたいがと尋ねられた大学生にもそう答えた。その大学生はその後自殺した。ショックだった。可能性があるとなぜ言わなかったかと。「不可能性をふくむ可能性だな」と思い、わたしは実行にうつした。どうす

れば詩業家になれるか。それは他者の話をよく聞き、預かり、言葉にすること。詩人の仕事とは、ひとりひとりの人生の「光」となるような言葉をつむいでいくことだと考えた。

詩は言葉で、言葉は態度で、態度は人生だから。希望を態度(アクション)につなげていく。詩を仕事にするという態度で生きていたら、「場」を作ることに結びついた。運良く出会った仕事によって「ココラム」という場をつくり、さまざまな事象に向き合ってきた。この場を借り、障がい者が生のこえでカラオケを歌うのに感動した。

障がい者と、言葉と声をつかうワークショップを継続し、舞台発表する「ほうきぼプロジェクト」から、もっとゆるやかに参加できて路上にでていく「ちんどんチャンス!」をたちあげた。紙芝居「むすび」のおじさんたちはいろんな人生を経て、多くの日雇い労働者を抱える「釜ヶ崎」にたどり着き、ホームレスを経て、現在は生活保護受給者。紙芝居を自作して上演したり、釜ヶ崎を知りたいという人たちを案内してくれる平均年齢74歳の7人ほどのグループ。「むすびプロジェクト」がはじまり、07年にはイギリス公演を果たし、釜ヶ崎における高齢者活動のモデルとなっている。

「ここが現場だ」ということに重みがあり、あまりに難しいので身動きとれず情けなかつたりするが、釜ヶ崎でアートNPOとして活動したい。

次回講座案内



第3回 まちづくり
『街づくりは人づくり
健全な大阪の再生』

土居 年樹さん
上方落語支援の会理事長
天神橋筋商店連合会会長

09年1月16日(金) 18時半～



第4回 くらし
『食の安全と地産地消
なにわの伝統野菜を
つくらう』

原 弘行さん
食糧を守り日本農業再建
すずめる府民会議会長

09年2月16日(月) 18時半～

会場 大阪市立住まい情報センター・ホール

大阪市北区天神橋6丁目4-20

●地下鉄堺筋線・谷町線「天神橋筋六丁目」駅下車3号出口より連絡

●JR環状線「天満」駅から北へ徒歩7分

資料代 500円



第2回 歴史

「関一と近代大阪の再建築」

大阪市立大学名誉教授
日本環境会議名誉理事長 **宮本 憲一さん**

12月12日(金)の第2回市民講座では「おおさかの歴史」が取り上げられ大阪市立大学名誉教授の宮本憲一さんが「関一と近代大阪の再建築」をテーマに大阪が光り輝いていた時代を大阪市長としての関一の業績をもとに語られました。詳細はニュースでご期待。